

青木実三郎没後三十周年記念

青木実三郎物語

一九九八年十月

馬木小学校 五年生

第一章 青木実三郎先生の紹介

「馬木には町がない。」と言われました。しかし、馬木には日本中に、いや世界にはこれる人物がいます。その名を「青木実三郎」といいます。

この人は、明治に生まれ、大正、昭和とわたしたちの馬木小学校で図画を教えた先生です。

実三郎先生は、馬木の自然や子どもを愛し、図画教育に情熱をかたむけ、子どもたちが絵をかくことに喜びを持ち、さらに絵をかくことで幸福になれるようにとみちびいた人です。

青木実三郎先生は、その著書、『農山村図画教育の確立』で次のように書いています。

「馬木の四季は変化にとみ、とても美しい。その美しい自然を背景に、人々のくらしが営まれるとき、そこに絵巻物や名作詩の世界がひろがる。私はかつて大阪や京都の学校の設備におどろいた。しかし、馬木のけしきを仮に都市につくるとしたら、いく千万円をかけても不可能であろう。こう考えた時、馬木の設備を悲しむべきではないと思った。」

この独特の考えが、一切の問題を解決し、中国地方の一山村の馬木が、天下にその名声をとどろかせるにいたったのです。(文・安部茂寿)

第二章 少年時代からはん学校卒業

明治十八年七月十二日、大馬木の女良木に 元気な男の子が生まれました。その名は、青木実三郎と言いました。お父さんは、後に馬木村の村長となった人でした。小さい時から、絵をかくのが好きな子で、庭の土に絵をかいたりして、よく遊んでいました。

小学校の作文に、将来図画の先生になりたいというようなことを書きました。

十九才の時についに念願の先生になるための学校「しはん学校」へ入学しました。この当時の学校の絵は、臨画といって手本をそのまま移すことが中心でした。実三郎さんは 思いました。「どうしても、臨画ばかりなんだろう。もっと自由にもっと美しく絵をかきたいなあ」

そんな時、師範学校で 大山を写生することになりました。実三郎さんは、老松の根っこにすわってかきはじめました。こんな美しい山を子供たちにもかかせてやりたいなと思いました。そして、しはん学校を卒業しました。実三郎さんはやっとな図画の先生になったのです。

第三章 訓導から校長時代

明治四十一年二十三才四月、鳥上村大呂尋常小学校の訓導となりました 訓導とはその頃の先生の言い方でした

実三郎先生は子どもの頃から訓導になって子どもたちに絵を教えるのが夢でした。実三郎先生は訓導になった一年目の年から図画教育に不満を持っていました。臨画の番号して窓にすがっていることが退屈でなりませんでした。四月鳥上村尋常小学校の訓導になりました。

十二月 八川小学校の訓導になりました。

明治四十四年二十六才、馬木村尋常高等小学校の訓導となりました。

馬木村は郡内の中でも一段と田舎扱いされる村でした。

馬木校の図画は児童がかいた絵を消しゴムで消して先生が鉛筆で直していました。

実三郎先生は、十二年経つと手本を中心としながら少し付け加えをさせました。

児童は授業をやると先生、「改作画でもいいですか」と言うようになりました。

これが、馬木校の想画の第一歩でした。

大正四年、三十歳の時、馬木村尋常高等小学校の校長となりました。

そこでも、全部の学年の図画を受け持ちました。県視学官の田中と言う人が、うさぎの絵を県へ持ち帰り、いい絵と紹介しました。初めて外部の人が馬木の絵を認めました。

大正八年三十四歳のとき、臨画から自由画にすることを宣言しました。

「画手本をはなれて好きな絵をかくこともよいことです。いろいろな絵の題を見つけてたくさん画題をもつようにしましょう。その題の中から一番好きなものをどんどんかきましょう。」

と児童に言いました。

大正九年三十五歳のとき、第一回自由画コンクールが開かれました。

馬木校からは、多数出品しました。安い筆でかいた絵具の絵、えんぴつでかいたもの、ごくわずかの色えんぴつでかいたものを出品しました。その中から、四人入賞、第一席に村の消防組の絵が選ばれました。

大正十一年三十七歳、三沢村尋常高等小学校の校長になりました。

学校を代わることになり一番惜しいのは、馬木の図画教育ができなくなることでした。

三沢でも図画は全部受け持ちました。

第二回自由画コンクールでは、第一席、第三席に馬木校、しんき員の内藤伸先生が

「馬木の子の絵は宝玉のような絵です。」

と言われました。

大正十三年三十九歳、実三郎先生の願いにより、三沢小学校の校長を退職し、あらためて馬木校でつとめることになりました。

実三郎先生は、校長をなぜやめたのでしょうか。その理由は、三つあったそうです。一つ目は、馬木校の生徒と、図画をやりたかったから。二つ目は、お父さんが、なくなられたから。三つ目は、馬木の自然が好きだったから。

この三つはどれもあてはまるけれど、一番の理由は、馬木校の生徒といっしょに図画をやりたかったからじゃないかと、ぼくたちはそう思っています。

第四章 馬木校図画確立の時代

実三郎先生は、校長をやめてから、また馬木の小学校の代用教員になりました。実三郎先生が校長に、

「馬木の図画教育については、安心してまかせてください。」

と、言い、校長も

「大いにやれ」

と、言われたそうです。学校では、六年生の担任をし、全校の図画を受け持ちました。

東京で行われた、国際交歓全国学生図画展で一躍脚光をあげました。「天衣無縫の作」「日本一」と有名になりました。

昭和三年には、チェコ・スロバキアの首都プラハの「国際美術教育会議で日本代表の霜田静志さんが馬木小の図画教育の取組を紹介しました。青木実三郎先生が図画教育で大切にされたことは、

「絵をかくには、かきたいものを注意深く見ておかないと絵は生まれえない。」

「相手は農山村の児童だ。」

「日本らしい姿で。」

と、いうことでした。

このころから、馬木小の絵がヨーロッパやアメリカにわたり評判となりました。今では考えられないくらいすごいことです。ぼくたちの大せんぱいの絵が世界でみとめられたことは、とてもうれしいことです。

馬木の子どもは歌いながらかき、かきながら歌う幸福感で成長していきました。

昭和四年には、和歌山県図画教育研究会で童画教育について講演をしました。

実三郎先生は、著書「農山村図画教育の確立」という本を出版しました。この本の中には、馬木の子どもたちの絵やその絵についてくわしく二五六ページにつづられています。

実三郎先生は、絵を読むことができます。ある絵は『紅葉ごろ』という題名でした。これは十一月ごろの馬木の風景です。山へ行った男の人が袋を背負っています。

実三郎先生は、

「空のすみが赤く焼けているので夕方らしい。冬の準備でまき取りに行った帰りだろう。向こうから来るおじさんは三度の飯よりたけ取りが好きだろう。袋の中にあるのは、何たけかな。たぶん香たけだろう。この二人が出会ったら、どんなあいさつをするだろう。『今日は、けっこうなお天気で……。大変なえものだね。』『香たけも、もう終わりだね・みんなかさがひろがってしまつて……。』『明日も天気らしいね。また、たけ取りかね。』『ハハハ……。三度の飯は、二度にしてもね……。ハハハ……。』といった会話だろう。今夜は香たけご飯にしたつづみだろう。馬木の秋は楽しいな。この絵は『紅葉ごろ』という題が付けてあるが、他にもっと良い題はないかな。『晩秋』（秋の終わりごろ）もいい。『山のえもの』もいい。『帰り道』それもいい。色々題名を工夫することも大切です。」

と、言いました。

実三郎先生は、『注意深く見て、心を落ち着けて、味わって』ということをし

何度も子どもに言い聞かせました。

昭和十九年には、五十九歳で永い永い、教員生活を終えました。三十六年間も先生として図画や他の授業なども一生けんめい教えてあげました。退職する時には、村長から感謝状を受けました。感謝状には次のように書かれています。

感謝状

あなたは、心やさしくその教職生活を、初等教育に捧げた熱心な教育者であり、明治四十四年三月三十一日馬木村尋常高等小学校につとめられて以来、昭和十九年三月三十一日に至る三十一カ年の間、校長として、また代用教員並びに訓導として、本村教育に終始力を尽くされ、学校教育はもとより、社会教育の指導にも専念されました。特にあなたは、文章表現力があり、図画教育の実践にあたっては、馬木村図画教育を全国的にその名を広め、今日のすばらしい教育を作り上げることができたのは、あなたの献身的な取組にほかなりません。今回老齢を理由に本村国民学校を退職されることに対し、村会の決議をもって長い間の功労を感謝し、金三百円をおくり、その意を表します。

昭和十九年三月三十一日

馬木村長

佐々木英一

青木実三郎 殿

第五章 教え子たちの恩返し

青木実三郎先生は、五十九才（昭和十九年）に先生をやめました。

実三郎先生は、絵の他にも楽しみなことがあります。それは、詩や俳句を書くことです。俳句の名前として、実房、股火、子乃司、があります。今で言え
ば、ペンネームのようなものです。

大洋の初日ほしいままの曲浦かな

これは、正月ごろの日記に書かれたいた俳句です。

昭和二十一年十一月十日、夜一時ごろ大事件が起こりました。馬木小学校が
火事になったのです。そして、午前三時にちん火しましたが、馬木小学校は全
焼し、実三郎先生が指導し、馬木小学校にあった絵は、全部燃えてしまいました
た。

しかし、全部焼けたわけではありませんでした。それは、実三郎先生が持っ
て帰っていた絵と、内田寛一さんが、実三郎先生からゆずりうけた絵は残った
のです。

この悲しい事件で、実三郎先生の体はだんだん弱っていき、ついに床につい
てしまいました。

そんな実三郎先生にも、うれしい事が起こりました。それは、教え子たちが
実三郎先生のすばらしさを広めようと『青木実三郎選集』という本を作ってく
れたのです。実三郎先生は、『青木実三郎選集』を読んで、この本から元気を
もらったかのように、だんだん病気が治っていきました。

実三郎先生の持っている『青木実三郎選集』の、俳句の書かれている下には、
新しく作った俳句が、びっしり書かれていたそうです。それほどうれしかった
のでしょう。そのころの日記には、たぶんよろこびの言葉でいっぱいだったと

思います。

「今日は、教え子たちが私の本を作ってくれた。教え子たちが私のことをこんなに思っていてくれるとは、思わなかった。教え子たちに感謝しなければならぬ。私は心がこんなにうれしい事は何年ぶりだろうか。教え子たちのためにも、私のためにも、元氣になろうと思う。」

ですが、青木実三郎先生は、昭和四十三年八十三才の時、周りの人から惜しまれながらこの世を去ったのです。

第六章 ありがとう、実三郎先生

振り返ってみると、実三郎先生の一生で、もっとも楽しかったのは校長をやめて、図画に専念していた時代だったでしょう。

実三郎先生のすごきは、子どもたちが立派な人間になるために、絵を教え続けたことです。

馬木の子どもたちがかいた絵は、ヨーロッパやアメリカにわたりました。その絵を教育してくれた実三郎先生は、馬木のこれからの図画教育を照らす大きな光になってくれました。

今の私たちは実三郎先生に感謝しなければなりません。

ありがとう、実三郎先生……。

※作品を読みやすくするため、標記をひらがなから漢字に変えた部分があります。